

末梢血液像で *Malassezia furfur* を認めた一症例

◎寺田 しのぶ¹⁾、大塚 のぞみ¹⁾、伊藤 千夏¹⁾、加藤 麻美¹⁾、川村 辰也¹⁾、南谷 健吾¹⁾
社会医療法人名古屋記念財団 名古屋記念病院¹⁾

【はじめに】*Malassezia furfur* (*M.furfur*) は正常なヒトの皮膚常在菌で脂質要求性の酵母様真菌として知られている。*Malassezia* 属菌に関連した疾患としては、癬風、毛包炎などの皮膚疾患が知られ、加えて欧米では脂質を含む高カロリー輸液の経静脈投与中に発症する真菌血症やカテーテル感染の発生報告がある。今回我々は PICC 挿入中の肺炎患者から末梢血液像で酵母様真菌及び好中球による貪食像を経験したので報告する。【症例】80 歳代男性。20XX 年 9 月、前医にて貧血、血小板軽度減少を認め経過観察。徐々に息切れが進行し、20XX 年 12 月再び前医受診。貧血、血小板減少の進行を認め、精査目的にて当院紹介。入院時の検査結果は、LD353U/L、CRP2.42mg/dL、WBC5100/ μ L、RBC134 万/ μ L、Hb5.1g/dL、Ht15.8%、PLT5.6 万/ μ L。末梢血液像は単球 51%、核幼若細胞 3%を認めた。骨髓像は過形成、核幼若細胞は N/C 比 80~90%、核小体を認め核網織細な細胞であった。また、核に切れ込みのある細胞も散見された。FCM を含む結果から急性骨髄性白血病と診断された。

【経過】入院 5 日後 PICC を挿入し化学療法開始。入院 1 ヶ月後より肺炎を併発し LAMB、LVFX 投与。その後も発熱は継続し、入院 2 ヶ月後、末梢血液像で酵母様真菌及び酵母様真菌を貪食する好中球を認めた。この為、血液培養検査を追加検査したが検出せず。採取が PICC からであったことが判り PICC 汚染を疑い、末梢静脈からの採血で検査した所、真菌や貪食像は認めなかった。PICC を抜去し培養をした結果、増菌培養にて真菌の発育を確認。*Malassezia* 属菌を疑ったが院内では同定に至らず、検査センターにて行った質量分析法で *M.furfur* と同定された。【まとめ】末梢血液像で酵母様真菌を認め、血液培養検査を施行したが検出できなかった。その後、PICC 培養で *M.furfur* と同定したが、当院では油脂を含んだ培地を使用しておらず、また経験がなかったため検出までに時間を要した。末梢血液像で酵母様真菌を認めた際は、*Malassezia* 属の存在も念頭に置き検査を進めることが重要であると感じた症例であった。名古屋記念病院 臨床検査部 052-804-5729